

在住外国人の家庭における日本語学習
- 父親監修の母子翻訳交換日記の検討 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析学クラスター
大西 康太

本研究は、外国人の母親とその子どもを対象に、日本語の読み書き能力の獲得と、母国語の読み書きの能力の維持を目的とした。また、父親にも役割を担ってもらうことで、親子で取り組むことができる日本語学習活動を開発し、苦痛なく継続的に日本語学習ができる支援方法を検討することを目的とした。また、外国人の母親と、その子どもが、その生活圏において日本語の使用を拡大できるようになることを目的とした。方法として、母子間の翻訳交換日記を用いた。これは、例えば、母親が母国語で日記を書き、子どもがそれを日本語に翻訳する方法であった。また、子どもも、母国語で日記を書き、母親がそれを日本語に翻訳することもあった。父親は、日本語の正誤をチェックする役割を担った。父親による否定的な評価が多くなることで家族関係が悪化する危険性があるため、研究者は週に1度、父親と話し合う機会をもち肯定的な評価や気に入った箇所の感想を記すよう指導する役割をもち、その危険性を最小化するようにした。そして、父親のチェック行動をカテゴリ別に分類し、その数を記録した。そして、父親と研究者とのチェックの一致度を測定した。また、介入の前期と後期とで日本語能力試験 N4 の問題集を実施し、その結果を記録した。また、プログラム考案のためのアセスメントとして研究者と対象家族との会話記録が用いられた。分析対象は、日記の一文あたりの文字数、父親の日本語正誤のチェック数、日本語能力試験 N4 問題集の得点率の推移であった。支援の目標として、外国人の母親と、その子どもが、2012 年度第1回「日本語能力試験 N3」に合格することを設定した。本研究の実施により、外国人の母親と、その子どもの、日本語の読み書きに対する意欲が高まり、日本語を用いたコミュニケーションが円滑になることが期待された。そして、日記による文章作成の継続により、語彙・文法の成績が向上すると期待された。また、父親が参加することで、親子のかかわりの頻度が増加し、親子の絆が深まると期待された。また、翻訳交換日記の有効性が立証されれば、日本語学習の方法として活用できると期待された。翻訳交換日記の実施期間を4つに分け、第1期間と第3期間では外国人の母親が、第2期間と第4期間では子どもが、日記を作成する言語、翻訳する言語において同じ作業を行った。分析対象である従属変数を、外国人の母親と子どもの両者において、期間における平均値で比較したところ、特に子どもにおいて後期の期間で、父親のチェック数が減少した。また、介入の前期と後期とで実施した日本語能力試験 N4 の問題では、子どもが後期において、文法の得点率が大きく上昇する成果があった。翻訳というツールを用いて言語学習をすすめるには、翻訳における第一言語となる言語に家庭で使用するものを用いるなど、十分に得意であるかどうかをアセスメントする必要があると考えられた。なぜなら、本研究の対象者の母国語は英語とビサイア語であり、家庭での使用言語はビサイア語であったが、翻訳を英語と日本語とで行ったところ、英語の能力が下がってきていることが示唆されたからである。そのため、翻訳作業による共通基底言語能力の獲得の効果が十分得られなかったかもしれない。また、翻訳交換日記は、言語を書く使用頻度を上げることに貢献したが、更に効果を見込めるように、今後は、話す使用頻度もともに上げる介入が望まれる。